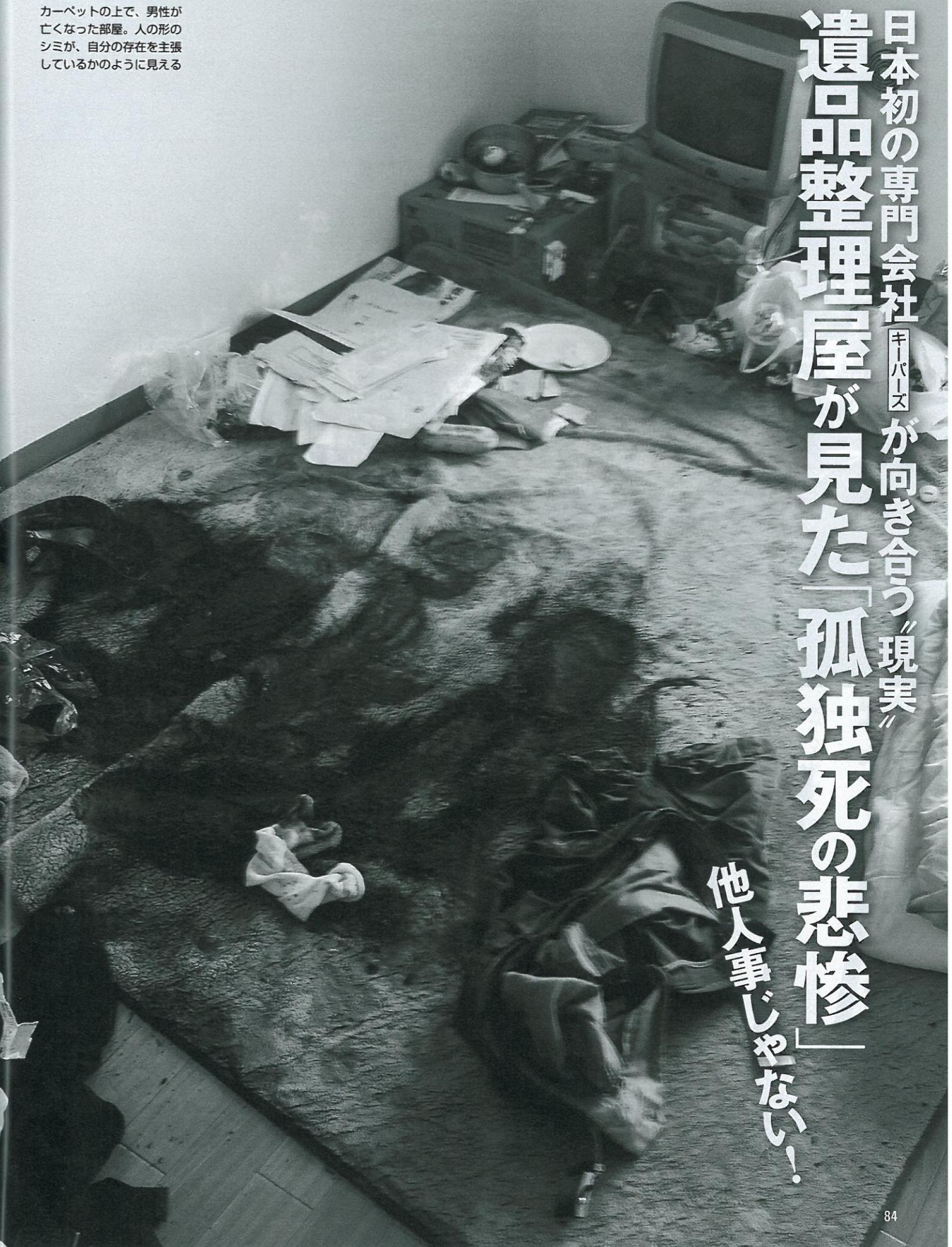


# 遺品整理屋が見た「孤独死の悲惨」

他人事じゃない!

カーペットの上で、男性が亡くなった部屋。人の形のシミが、自分の存在を主張しているかのように見える



遺品整理のプロ集団「キーパーズ」のスタッフの作業写真。故人に敬意を払いながら、丁寧に作業をする

専門業者でも、思わず立ちすくむ現場がある。すでに運び出されているから、遺体はない。けれども、死に至るまでの格闘の痕跡は、鼻をつく異臭とともに、その場にくっきり残っている。

56歳の孤独死した男のアパート。「ミニの山をかき分けながら部屋の中ほどまで進んだところで、足が止まった。何に苛立つてそつしたのか、執拗に足で蹴つて破った歪な穴が、トイレのドアの下半分にぼっかり空いている。すぐ横の冷蔵庫には、マジックで黒々と書かれた「忍耐」の二文字。ギリギリという歯ぎしりや呻きが、その二文字から伝わってくる。

遺体発見のきっかけは、3カ月の家賃滞納だった。警察立ち会いのもと、大家が部屋の中に入ると、男は布団の中で冷たくなっていた。死後2カ月。凄まじい腐臭が部屋に充满していた。九州から上京してきた兄は、弟が暮らしていたアパ

ートに立ち寄ることもなく、後始末を大家と遺品整理業者に頼んで故郷に帰ったという。

## 50代から危ない

ある公営団地で亡くなつた、75歳の独居老人の場合はこうだ。死後1カ月、遺体が放置されていた部屋に続く階段を上ると、階段脇の溝に、丸々と太ったウジ虫が這いついていた。覚悟して扉を開けると、無数のウジ虫が床を埋め尽くしている。比較的少ない床を選んで歩を進め、亡くなった和室の布団をめくると、そこはウジ虫の孵化場とながらだつた。殺虫作業の後、孤独死した老人の息子に会つた。聞けば同じ公営団地の一つ上の階に住んでいたのに、1カ月もの間、父の死に気づかなかつたという――。

一つの「孤独死」は、日本初の遺品整理会社「キーパーズ」社長の吉田太一氏

多くの場合、孤独死する人の部屋は「三が散乱している」という。身の回りのことに気が配る余裕もないのか

